

平成25年度修士論文・卒業論文概要

門, 悟

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

鄭, 春紅

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

朴, 玲河

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

安達, 陵人

九州大学教育学部 : 学部生

他

<https://doi.org/10.15017/1498395>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 17, pp.119-146, 2015-03. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

学校外での学習活動と子どもの習慣に関する一考察

安達 陵人
(平成 26 年 3 月卒業)

【章構成】

- 序章 本論文の目的と方法
 - 第 1 節 本論文の目的
 - 第 2 節 本論文の方法と構成
- 第 1 章 学校外での学習活動の現状
 - 第 1 節 小中学生の学校外での学習活動の状況
 - 第 2 節 学校外での学習活動に対するこどもの意識
- 第 2 章 学習塾の利点と課題
 - 第 1 節 学習塾の利点
 - 第 2 節 学習塾の課題
- 第 3 章 学校外での学習活動とこどもの習慣との関連—大学生へのアンケート調査を通して—
 - 第 1 節 学校外での学習活動状況
 - 第 2 節 生活習慣との関連
 - 第 3 節 学習習慣との関連
 - 第 4 節 小括
- 終章 本論文の成果と課題
 - 第 1 節 本論文の成果
 - 第 2 節 本論文の課題

【概要】

序章 本論文の目的と方法

近年、学校外における学習活動を行う子どもが増えている。文部科学省が平成 20 年に行った「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」によると、何らかの学校外における学習活動（この調査では、学習塾、家庭教師、通信添削、ならいごとの 4 種類）を行う小学生は平成 19 年で 81.6%となっており、昭和 60 年の 76.0%と比べて 5.6%上昇している。中でも学習塾に通う小学生は昭和 60 年の 16.5%から平成 19 年の 25.9%に上昇しており、「学歴社会」といわれる現代を象徴している。

しかし一言に塾といっても、進学塾、補習塾、個別指導塾、集団指導塾などその種類は様々である。また学校外における学習活動は塾に限らず、特に通信添削を使った学習を行う小中学生は、平成 5 年から平成 19 年にかけて 11.7%から 18.7%へと急激に増えており、こちらも無視できない存在となっている。

本論文ではこれらの点に注目し、大学生を対象

にしたアンケートを行い、その結果をもとに学校外における学習活動が小中学生の生活習慣、学習習慣にどれほど関係するのかを考察する。

第 1 章 学校外での学習活動の現状

第 1 章では文部科学省の調査を基に、小中学生の学校外での学習活動の現状を把握することを目的とした。調査時（平成 20 年）、全体では 5 人中 4 人が何らかの学校外での学習活動を行っており、その割合は過去の調査と比較して伸びているという事が分かった。特に中学生の活動の増加が著しかった。

学習形態別にみると、学習塾や通信添削ではその伸びが顕著であった。それに伴い平均月謝や一日の指導時間もまた、どの学習形態でも増えていた。また、進学準備のための学習や英語の学習といった目的で学校外での学習活動を行う子どもが増えていた。今回の調査結果を都市階層別に分けると、都市規模が大きいほど通塾率は高くなる傾向がみられた。

また同調査を基に、子どもが学校外での学習活動に対して抱いている意識に関して考察した。子どもが活動に対して「好き」と感じている割合は、ならいごと以外では約半数であるという事が分かった。ならいごとは比較的「好き」と感じている割合が高かった。また学年が上がるにつれ、活動を嫌う割合が高くなる傾向があった。子どもが活動に対して「好き」と判断する理由は「学校では教えてくれないことを教えてくれる」、「友人と会える」などが全体に多く、「嫌い」と判断する理由は「友人と遊ぶ理由が減る」「疲れる」などが多いことがわかった。

第 2 章 学習塾の利点と課題

第 2 章では、過去の文献・調査や文部科学省の調査から、学習塾の利点・課題に関して整理することを目的とした。

利点としては、子どもの学習意欲を向上させること、アイデンティティ発達に対して肯定的な影響を与えること、学校教育と連携できることなどが挙げられた。また保護者が、家庭にいなくても子どもに安心して勉強させておくことができることや進学に関する情報を得られることを利点だと感じている場合も多かった。

課題としては、家庭の経済的負担、進学競争の

激化に拍車をかけること、子どもの生活習慣に悪影響を与えることなどが挙げられた。保護者や子どもも、経済面での心配をしている場合が多かった。

第3章 学校外での学習活動とこどもの習慣との関連—大学生へのアンケート調査を通して—

第3章では、学校外での学習活動とこどもの習慣についての考察を、大学生へのアンケート調査を基に行った。このアンケート調査は、平成25年、九州大学の学部生を対象に行った。調査で来た人数は89人であった。質問内容は、学校外での学習活動の経験、始めた時期、時間帯などの活動内容の他、学習習慣、生活習慣、成績などに関してである。

アンケートの集計結果から、9割以上の人少なくとも1つ以上の学習活動を経験していたということがわかった。学習形態別に見ると、学習塾やならいごとの経験が多いことがわかった。活動開始時間に関しては、家庭教師やや遅く、ならいごとはまた学年やや早いことがわかった。どの活動形態に関しても、活動をしている学生が上がるにつれて活動開始時間は遅く、活動時間は長くなっていることがわかった。

生活習慣に関しては、平日に遊ぶ時間に関しては2～3時間という回答が最も多く、休日の場合は時間が全体的に多くなり、3～4時間という回答が多いことがわかった。睡眠時間に関しては6～8時間という回答が3割強と最も多かった。夕食に関しては、18時～19時間に家族と食べるという回答が多いことがわかった。学習形態別に見ると、遊ぶ時間に関してはほとんど差が見られなかったものの、睡眠時間に関しては通信添削がやや長く、ならいごとがやや短い傾向にあることがわかった。また夕食に関しては、学習塾と家庭教師がやや遅い時間に一人で食べている傾向が強いことがわかった。

学習習慣に関しては、平日の1日の学習時間に関しては1～2時間という回答が4割強と最も高い割合であることがわかった。センター試験の点数に関しては、7.5～8割という回答が多いことがわかった。

学習形態別に見ると、学習時間は通信添削がやや多く、ならいごとがやや短い傾向にあることがわかった。またセンター試験の点数は、学習塾(特に集団指導塾)と通信添削がやや高い傾向にあることがわかった。

終章 本論文の成果と課題

本論文では文部科学省の調査から子どもの学校外での学習活動状況を考察し、また過去の文献・調査や文部科学省の調査から、学習塾の利点・課題に関して整理することができた。そして、アンケート調査の結果から学習塾、家庭教師、通信添削、ならいごとといった学習形態の違いによって子どもの生活・学習習慣に若干の違いが表れていることがわかった。

しかし、アンケート調査の標本数があまり多くなく(特に家庭教師による指導を受けた経験のある人が少なかった)、子どもの生活・学習習慣の違いが本当に学習形態の違いに起因していたかどうかは不明確であった。学校外での学習活動を経験したことがない人もかなり少なかったため、経験者との比較がままならなかった。

また、集団指導塾と個別指導塾の違いに関して、成績などで若干の違いが見られたものの、それ以外ではっきりとした違いは見つけることができなかった。そして学校外での学習活動を始めた時期と子どもの習慣との関連についての考察を行うことができなかった。

学校外での学習活動の形態は今回の4つの形態だけとは限らず、これ以降も増えていく可能性が大いにあるため、今後も学校外での学習活動に関する調査が継続して行われるべきだと感じた。

【主要参考文献】

- ・文部科学省「子どもの学校外での学習活動に関する実態報告」、2008年。
- ・結城忠ほか著『学習塾：子ども・親・教師はどう見ているか』ぎょうせい、1987年。
- ・黒石憲洋、高橋誠「学校教育と塾産業の連携についての一研究：現状の分析と今後の展望」『日本教育大学院大学紀要』2、2009年、pp. 1-14。
- ・宮下一博「学習塾・稽古事への通塾経験及び遊び経験が青年のアイデンティティ発達に及ぼす影響」『千葉大学教育学研究紀要』I、教育学編44、1996年、pp. 1-12。
- ・佐柳信男、黒石憲洋「小・中学生における学習塾通いと動機づけの関係(1)：通塾の動機づけへの影響に関する縦断的検討」『日本教育心理学会総会発表論文集』(52)、2010年、p. 714。